校長室より　NO.13

令和元年 12 月 9 日

県立足柄高等学校長　吉川　亮

オリジナル・フォー

今年も残すところあと 20 日余りとなりました。今回は、今年の夏に聞いた箱根駅伝にまつわる話を書きたいと思います。

ＮＨＫの大河ドラマ「いだてん」もいよいよ佳境に入っていますが、このドラマの主人公（モデル）である金栗四三（かなくりしそう）さんは、日本からはじめてオリンピックのマラソンに出場した方として知られています。大河ドラマを見ている人は知っていると思いますが、当時の世界記録を出していたにもかかわらず、３度出場したオリンピックでメダルはありませんでした。

ちなみに私の三代前の足柄高校校長の高橋悟先生は、高校時代「韋駄天（いだてん）高橋」と呼ばれた有名な陸上の選手で、私が夏に話を聞いた筑波大学陸上部ＯＢ・ＯＧ会会長の船原勝英さんの大学の同級生です。

さて、この金栗さんですが、実はお正月の風物詩となっている箱根駅伝を始めた人物でもあります。第１回の箱根駅伝は、1920（大正 9）年の 2 月 14 日に開催されました。参加した大学は、早稲田大学、慶応大学、明治大学、東京高等師範の 4 校でした。俗にオリジナル・フォー（４）と言われています。当日は大学の授業が土曜の午前中にもあったため午後のスタートで、箱根の山登りが始まるころには日没となり、小田原周辺の青年団がたいまつを焚いて道を照らしたり、猟銃を打っていのししなどの動物を追い払ったりしたそうです。そして優勝したのは、金栗さんの母校である東京高等師範、現在の筑波大学でした。

箱根駅伝は関東にある大学の対抗駅伝で、全国規模でないローカルの大会です。その後も沿道の住民や警察の協力を得ながら大会は続きました。東京高等師範は、東京文理大、東京教育大と名前を変えながらもコンスタントに本大会に出場し、中位レベルの成績を維持してきました。国立大学でありながら 100 人を超える陸上部員がおり、教員養成大学として全国の大学・高校に保健体育の教員を送り込む体育教育の一大拠点でした。

筑波大学と名前を変えてからもしばらくは箱根駅伝に出場していましたが、1989（昭和 64）年の大会を最後に、連続出場の記録は途切れます。その後 1994 年に一度復活しますが、その後ずっと出場できませんでした。船原さんによれば、筑波大学が箱根駅伝に出場できなくなった最大の要因は、1987（昭和 62）年にテレビ中継が大々的に始まったことだということです。電波の通らない箱根山中にたくさんのアンテナを立て、スポンサーを獲得して正月恒例の番組に仕立てたのが、皮肉なことに筑波大学の前身である東京教育大学出身の日本テレビ坂田信久プロデューサーでした。

大学入試の出願時期にまさに重なる正月の 2、3 日に長時間放送される番組で、大学名が連呼されることの宣伝効果に気が付かない大学はありません。一斉に駅伝部の強化が始まります。こうした中で、インカレ（大学の陸上全国大会）で何度も総合優勝を

する陸上部を擁しながらも、20㎞を走れる長距離選手を 10 人以上確保するのは筑波大学にとって難題で、100ｍが専門の短距離選手がメンバーに混じることもあったそうです。こうして、金栗さんの母校には長い苦難の時代がやってきました。

一方、箱根駅伝の放映権料が陸上競技連盟には入りましたが、陸連はこの一部を短距離選手の強化にあて、指導者を海外に派遣するなどしました。その結果、それまでまったく世界で勝てなかった短距離の選手層が充実してきて、皆さんもご存じのように北京オリンピックの 4×100ｍリレーで男子がメダルを獲得し、桐生選手をはじめ 100ｍを 9 秒台で走る選手が続出します。そしてこれも皮肉なことに、マラソンなど長距離は、その人気とはうらはらに、オリンピックのメダルからは次第に遠ざかっていきました。

最後に、箱根駅伝から消えた筑波大学のその後について紹介したいと思います。

2011（平成 23）年、「筑波大学箱根駅伝復活プロジェクト」が始まりました。かつて箱根駅伝の名選手として鳴らした、卒業生の弘山勉（ひろやまつとむ）さんを監督に迎え、国立大学ゆえの厳しい財政事情を、インターネットを通じて募金を集めるクラウドファンディングで補充しながら、練習機会を確保していきました。

そして昨年の予選会では、本大会出場まであと 8 分のところまでレベルがあがりました。そして今年、2019（令和元）年 10 月 28 日、箱根駅伝予選会で 26 年ぶりの本大会出場が決定しました。

「いだてん」の金栗四三さんも、きっと天国でよろこんでいるだろうと思います。